

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1994 号

Development of a modified prognostic index of patients with aggressive adult T-cell leukemia-lymphoma aged 70 years or younger: a possible risk-adapted management strategies including allogeneic transplantation

(70 歳以下のアグレッシブ成人 T 細胞白血病における修正予後予測モデル：同種移植を含めたリスクに応じた治療戦略の可能性)

藤 重夫 (ふじ しげお)

博士 (医学)

論文内容の要旨

成人 T 細胞白血病・リンパ腫 (ATL) の急性型・リンパ腫型 (アグレッシブ ATL) は通常化学療法のみでは生存期間中央値が 1 年程度で予後不良な血液悪性疾患の一つである。本邦より同種造血幹細胞移植施行例において期待される成績が報告されており、70 歳以下のアグレッシブ ATL に対して同種造血幹細胞移植が施行されるようになってきている。しかし、移植適応年齢アグレッシブ ATL において予後予測モデルが確立されておらず、そのリスク毎での移植の意義に関して検討されていない。その為、今回我々は 70 歳以下のアグレッシブ ATL のデータベースを全国調査から作成し、そのデータを元に予後予測モデルの再構築を試み、そのリスク毎の移植の影響に関して統計学的に検討した。解析対象となった 1792 例のアグレッシブ ATL を Training set と Validation set の 2 群にランダムに分けた。Training set を用いて予後予測モデルの作成を行い、最終的に急性型、PS 不良、sIL-2R 高値 (>5000 U/mL)、補正 Ca 高値 (≥ 12 mg/dL)、CRP 高値 (≥ 2.5 mg/dL) が有意な因子として抽出され、各々のリスク因子を 1 点としその合計点が 0-1 点を低リスク群、2-3 点を中間リスク群、4-5 点を高リスク群と設定した。Validation set を用いて検討したところ生存期間の中央値が 626 日、322 日、197 日と 3 群に層別化可能であった。各々のリスク群毎に同種移植の有無で成績を比較したところ、中間リスク群および高リスク群においては同種移植施行例の方が予後は良好であった。今後本予後予測モデルに基づいた治療戦略の有用性を前向きに評価していく必要がある。